



孫家園志

後編  
七

遠13  
2475  
27



門 遠 13  
番 2475  
巻 27

徳本

判

徳念見可也

瓶子

判友  
代

徳念見可也二篇巻之七

目録

徳原乃子 京都合衆の文

并 徳原一談 徳念の文

判友代徳念生撰りの文

并 刑部忠友系徳念の文













のつておきて今日迄目的とけん  
や致義一りらか成ふ力を賜ふを  
頼むとてとて一其のつとけん  
しよまうしあらしとせんといふ  
うしげぬるあまうしとけん  
みゆかぬしとけんあらしとけん  
今けんあつとけんあらしとけん  
けんあらしとけんあらしとけん

恐るしけんあらしとけん  
しよしけんあらしとけん  
そのけんあらしとけん  
けんあらしとけん  
けんあらしとけん  
けんあらしとけん  
けんあらしとけん  
けんあらしとけん  
けんあらしとけん  
けんあらしとけん



の月人吉志が以肩石系母神命  
滋原次郎手取小以肩其外也  
此書ありと判系之はまらうつし  
入新巻山に肩大新撰原中を以て  
くうひよ西体志まがくし討とら  
此名也一物原をよとてつらとら  
おのいけとのうらやせり事い面  
の位人吉志小以肩而新也といふ

一に味系のものも種とて名系  
己しや一物原と包むあやうなる  
新巻山に肩大新撰原中を以て  
くうひよ西体志まがくし討とら  
此名也一物原をよとてつらとら  
おのいけとのうらやせり事い面  
の位人吉志小以肩而新也といふ







ちわ子及仲してまゝに御をせぬらよ  
お新あしとまゝに七郎新八郎新  
治、九郎新連、是等五人、あ子、あ子十  
多つとまゝに三三三三三三三三三三  
甲乙の人多きみよめてみたりよ吉原  
お節をよとみよ謀どくも一宿免  
の村とまゝに十余人、梶原又子ら  
櫛を扱ふらうみよのりとしら新

新さきもまゝに新村ちまゝにせらる  
ほうと臨ぐ人もまゝにあらうと吉原  
まゝに物口、あ子、あ子、あ子、あ子  
の島土、あしとまゝにあしとまゝに  
のん新あしとまゝにあしとまゝに  
みつらあしとまゝにあしとまゝに  
あしとまゝにあしとまゝにあしとまゝに  
あしとまゝにあしとまゝにあしとまゝに

甲人のとまがむ 終に討死に くらとる解  
と 極とあふに 討死に くらとる解  
み子しりひ 病あけふ くらとる解  
悟りてあふに 討死に くらとる解  
敵のよふに くらとる解  
の生をいひて くらとる解  
敵に くらとる解  
敵のよふに くらとる解

今日のまありしに 美ともあらく 敵を  
あつてまよふ 迷の目 敵は 極とあふに  
あつて 敵を 美憎い 志は くらとる解  
敵あつて 上は くらとる解  
くらとる解  
くらとる解  
くらとる解  
くらとる解  
くらとる解  
くらとる解















さ一神子具氣ときれを一は名怪を  
作集之との一ら子陰を五氣を  
ふだ天と作してあつた一は名  
死と生まんとして一は名  
くそらゆりまふとけりまふ王如く  
命けりらると悔ふらつた人のまふ  
まふおを陰家らつた一は名  
まふありと具氣の死と生を  
まふありと具氣の死と生を

そららしきまふと一は名  
必あてい死と生を  
る砂りらると一は名  
ま付らつた子自名らつた一は名  
るしともまふと一は名  
時の余と生と一は名  
くまふと生と一は名  
まふと生と一は名

三節 粉石のやま 階石の修り  
元日 本日 修築の事  
減るの事  
おらちには 修築の事  
修築の事

宿二年 正月廿日 修築の事  
修築の事  
修築の事

- 一 新築の事 修築の事
- 一 修築の事 修築の事
- 一 修築の事 修築の事
- 一 修築の事 修築の事
- 一 修築の事 修築の事



あつらひしに踏む面月と施しにふ  
後節友軍は原野をか伐りて  
のち一歩一歩と歩むと銀一糸く  
面影は後を信世にまわりの  
其一家吉川氏に送りて  
子孫にまわるとも其後には  
京師にありて是を  
とて母を平に親長を  
とて

上格して世に近衛とありて  
子孫に金部権原刑部  
の十二月に書付し  
らましに  
て  
書付し  
まし  
らま





